

観光都市 フィレンツェのエピファニア

森記念財団研究員
脇本敬治

年末年始に短期間であるがフィレンツェに滞在した。ルネサンスの都市として世界に知られたフィレンツェは寒いこの時期にも、多くの観光客が訪れていた。日本では馴染の薄いと思われる、エピファニアを体験することができたので報告してみたい。

昨年のクリスマスは12月21日ごろから始まり、年明けの第1週目までと日本に比べると長い。クリスマスの日には家族で集まって食事を楽しみ、新年もまた親族家族、友人が集まることが多い。年末のカウントダウンを祝うコンサートが街の広場を会場に何か所か開かれるが、新年を迎える瞬間には爆竹の音が鳴り響き、日本の新年を迎えるようなおごそかさはない。クリスマスの最後となるのがエピファニアのお祭りだ。クリスマスツリーの飾りつけも、この日に片づけられる。

エピファニアはキリストの誕生を祝し東方の三博士が訪れたことを記念する祝日である。子供たちは前日に靴下をぶら下げておくと、ベファーナと呼ばれる魔法使いのお婆さんが、良い子にはお菓子を、悪い子には炭を入れておくとされるのでとても楽しみな日だ。この休みが終わると学校が始まるので、子供にとっては名残惜しい日でもある。

フィレンツェではこの日、ピッティ宮殿から、イエス様やマリア様の待つ馬小屋が設けられたドゥオーモまで、大きな行進がある。日本の時代祭の様な、昔の衣装を着た一団が隊列を組み、楽隊の音楽に合わせ、街並みの中をゆったりと進んでいく。先頭は三博士で、その後に、子供達、騎士、楽隊や旗、鷹狩の人やダンテとベアトリーチェが行進する様はとても見応えがある。中世フィレンツェの繁栄を伝えるような衣装は素晴らしく、近くで見るとその豪華さに圧倒される。宮殿や旧市街は昔の建物が多く残っているので、行進を見ていると中世にタイムスリップしたような気になる。参加しているのは地元のボランティアとのこと。この行進は10数年前から始まったらしく、観光シーズンがオフとなる冬にもさまざまな工夫を凝らしていることがうかがえる。

エピファニアが終わると、今度はセールが始まる。大人たちは、こちらの方が気になるようだ。エピファニアの前からセールを始めている店もみられるが、大々的に始まるのはこの日前後から。お店によっては「1時から2時半まで昼休み」と貼り紙がされている所もあるので、注意が必要。パッセジャータといって午後から中心街に散歩に出かける習慣があるので、エピファニアの日の夕方に行進の見物客と、地元の散歩に出かける人で、信じられないぐらいの賑やかさだった。



ピッティ宮殿前に勢ぞろい



行進の前にダンスを披露



鷹匠と思われる人たち



フィレンツェ出身のダンテとベアトリーチェ



緋色が素晴らしい楽隊の衣装



甲冑姿の騎士は子供の注目の的